

『捷解新語』原刊本の撥音について

— その表記を中心に —

韓 先 熙

1. はじめに

「朝鮮資料」とは、日本語の歴史的研究に役立つ資料のうち、朝鮮にかかわるものを指す。これには、朝鮮人によって作られた日本語の学習書と、日本で日本人によって作られた朝鮮語の学習書とがある。『捷解新語』は前者にあたる資料で、体裁の完備したものとしては最初の日本語学習書である。その書名は「新しい言葉を速やかに習得するための書物」の意を表している。当時の朝鮮の訳官にすぐに役立つ日本語を教えるとともに、接待や交易、その他必要な事柄を教えるために作られたのだろう。著者は1592年に日本の捕虜となり、10年間抑留され、その後、帰国して釜山の「訓導」に五度任ぜられ、役人として再び日本に渡来した康遇聖であると言われている。

一口に『捷解新語』と言っても、複数の版本が出されている。最初のものは、1676年に朝鮮で開版された（これを「原刊本」と呼ぶ）。その後1748年に改訂されたものを『改修捷解新語』、さらにそれを1781年に重刊したものを『重刊改修捷解新語』と言う（注1）。いずれにせよ、十巻に分かれ、巻十の候体書簡文を除いて他の九巻は口語体の会話が書かれている。「御」「申」等の二～三の漢字を除き、日本語はすべて平仮名で表記され、その右に諺文（ハングル）で音が表されている。また、フレーズやセンテンスごとに朝鮮語で対訳が付されている。

本稿においては、先の諸本のうち、最も刊行の古い原刊本を扱うこととする。

2. ハングルについて

諺文（ハングル）とは、李氏朝鮮第四代の世宗王が学者を集めて作った文字である。1446年「訓民正音」によって公布された、独創的で人工的な音素文字である。この文字は、初声・中声・終声の三つの構成部分から成る。原則的に、子音字は初声・終声として用いられ、母音字は中声として用いられる。わかりやす

く言うと、各構成部分は、アルファベットと同じように、子音や母音等の音素を表しているわけである（図1参照）。ちなみに、本稿で取り上げる撥音は、子音字を用いた終声にあたる。

ハングルのこの特徴を生かせば、漢字仮名混じり表記では伝え切れなかった当時の日本語の音が見えてくるのである。この点で、朝鮮資料はキリシタン資料と並ぶ音韻資料である。なお、本稿では今後この文字、さらに朝鮮語までも含めてハングルと称することにする（注2）。

＜図1＞ ハングルの子音と母音

＜子音＞	＜母音＞	＜組み合わせ＞
ㄱ [k, g]	ㅏ [a, ア]	
ㄴ [n]	ㅑ [Ja, ヤ]	
ㄷ [t, d]	ㅓ [o, オ]	
ㄹ [r]	ㅕ [jo, ヨ]	
ㅁ [m]	ㅗ [o, オ]	
ㅂ [p, b]	ㅛ [jo, ヨ]	
ㅅ [s]	ㅜ [u, ウ]	
ㅇ [ゼロ, ø]	ㅠ [ju, ユ]	
ㅈ [tʃ, dz]	ㅡ [w, ウ]	
ㅊ [tʃʰ]	ㅣ [i, イ]	
ㅋ [kh]		
ㅌ [th]		
ㅍ [ph]		
ㅎ [h]		
△ [z]		
(現在は使われてない)		

3. 研究方法と資料

本稿では、『捷解新語』原刊本を用いて、室町末期～江戸初期の日本語の撥音について考察する。

ハングルでは、日本語の撥音にあたるものとして〔m〕、〔n〕、〔ŋ〕の子音字を用いるのが一般的である。ところで、原刊本において、これらの子音字は、「次に来るハングル文字の初声（子音）を濁音化させる」ためにも用いられている。これは、一般にはない用法である。

今回は、このうち明らかに撥音を表していると考えられる用例だけを集め、本文の日本語の表記にもとづき、表にまとめた。さらにそれをもとにして、撥音の例をハングル表記によって三つに分類し直し、撥音が当時どのような音価を持っていたか、またはその撥音を含む語がどのような性格を持っていたかなどを考察してゆく（注3）。

なお、原刊本には「御めにかかろん」「しろんゑとも」「なりませいんて」「とらしられんゑは」などの表記が見られるが、これらについては慎重な扱いが望まれるので、今回は対象外とする。

資料としては、京都大学文学部『三本封照捷解新語本文篇』（昭和47年9月）『三本封照捷解新語釈文・索引解題篇』（昭和48年8月）を用いた。

4. 考 察

原刊本に仮名表記「ん」で表れる撥音は、ハングルでは〔m〕、〔n〕、〔ŋ〕の三つで表記されている。以下、それぞれの項目に従って分類した表をもとに、説明していく。ただし、網羅的な説明はさけ、特徴的な語だけ説明する。表の中の日本語の表記は『捷解新語』本文に書いてあるのをそのままのせたため、濁音符は付されていない。

4-1 日本語で「ん」と書かれていて、ハングルで「m」と書かれているもの

表1

本文中撥音が「m」で書かれている語は、総数41例である。それを、字音語と地名と和語とに分類した。字音語についてはさらに表のようにそれぞれ次に来

る音素によって、「m」が来る場合、「pp」が来る場合、「mp」が来る場合、「k」が来る場合、「p」が来る場合とに分類した。撥音の後、「m」が続く語は五種10例であるが、これは次の音素が「m」で始まる場合、その前の撥音が「m」であることをよく表している。これはロドリゲスの『日本大文典』(注4)に「日本語の発音法」に「BMPの前では、常にMと書いて、唇を打ってMと発音されるのであって、Nではない。例えば、Membocu (面目)、memmen(面々)、Mempai (面拝)、Ximbionari (神妙なり)、Bambut (万物)、Bammot (万物)、(Quempu (絹布)、Mamman (漫々) など」と、述べられていることと一致する。ここで注意すべき語は「もんめん」(木綿)である。ハングルで **몸뎌** [mommyoin] と書いてあるのである。参考までに、『邦訳日葡辞書』(注5)では、[momen] となっている。この現象はハングルの漢字音の影響ではないかと思われる。ハングルの木綿が [mong myen] (注6)で発音されるため「木綿」の「木」のところを [mong] と発音し、また次の「綿」の影響で [mom] と表記されたと思われる。仮名表記もハングルの漢字音にひかれて「もんめん」と表記したのではないかと思われる。

次は [pp] が来る「かんほく」である。「品」が「ほく」と書かれている。「品」にあたるハングルの漢字音は [ㅍ p'um] (『倭語類解』官職上、三十五)であるため、ハングルの漢字音に引かれたとは言えないのである。これについて浜田敦氏は、意味の上から見本を検査する一種の儀式、同義の言葉である「看色」の干渉によって「品」が汚染されて「ほく」の形が成立したと述べておられる(注7)。しかし、この節は「ほく」を説明するのに十分なものではなく、その理由については現在でもはっきりとはわからない。

また、この撥音にハ行音が接していて、そのハングルの表記が濁って読めないような [pp] で書かれているため、注目される。ロドリゲスの『日本大文典』には、「N、又はMの後に f に始まる語が続く場合には P に変わる。例えば、Mempai (面拝)、Mompa (門派)、Mampaxen (万八千)。然しながら Sam bai (三杯)、Sambiqui (三匹) というのはにごりの一般の法則に従うものである」(p636)との記載があり、同書の「“すみ”と“にごり”の用法に就いて」の項目にその法則が、「うむの下濁る」(p632)と述べられている。しか

表 1

	日 本 語	ハ ン グ ル	ハングルのローマ字表記	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	計
	[m] が来る場合													
1	けんもつ (見物)	겜모쥬	kyəm mo cçu					1			3			4
2	ちんみ (珍味)	짐 미	cim mi							1				1
3	はんみち (半道)	합 미지	hoəm mi ci								1			1
4	めんもく (面目)	멤모구	myəm mo ku							2				2
5	もんめん (木綿)	몸 먼	mom myəin			1								1
	[pp]													
6	かんほく (看品)	감뽕구	kam ppo ku		4	3	2							9
	[mp]													
7	さんふきゅう (三奉行)	삼뽕교응	sam mpun kyo'u							1				1
8	せんはん (千萬)	섬 만	syəm mpan									1	1	
	[k]													
9	せんくわん (倉官)	섬 관	syəm koan		1								2	3
	[p]													
10	せんふ (膳部)	셈 부	zyəim pu		1									1
11	はんぶん (半分)	합 분	Hoəm pun				2							2
12	ふんへつ (分別)	흠뽕쥬	hum pyəicçu				4							4
	[地名]													
13	たんは (丹波)	담 바	tam pa									1		1
	[和語]													
14	なんひき (何匹)	남비기	nam piki				1							1
15	なんほう (何程)	남보우	nam po'u		2	1	1	4			1			9
計				2	7	5	13	1		4	5	1	3	41

し、『日本大文典』にそのように書いてあっても、「かんほく」の「ほ」に当てられたハングル表記並書〔pp〕を「半濁音表記である」あるいは「濁音を誤って半濁音で記した」などと決めつけることはできない。ハ行・パ行・バ行（清・濁・半濁）の対立という複雑な問題を含んでいるからである。中世末期にはどういふ音が存在したかを確定するのは難しい問題である。また、ハングル表記の〔pp〕の並書（同じ音素を並べること）は前出の『訓民正音』などにおいてはシナ語の並母の声を表すために用いられているが、『捷解新語』では並書はカ・タ行の清音およびソ・ノの計十二音節に対して用いられており、それらは濁音ではないことを明示するために用いられたものと考えられる。勿論、その当時の朝鮮人が日本語の「清濁」に対する音韻的区別がはっきりしていたとは一概には言えないが、これらはすくなくとも語頭の濁音を表している語ではないので、日本語の正しい音を書いたと言えるのではないかと思う（注8）。

そこで考えられるのは、浜田敦氏も述べられているように、中世末期までにはバ行音が出てきて、撥音に続くべきバ行のところに割り込んできたのではないかということである。例えば、「関白」が〔クワンパク〕と並んで、半濁音〔クワンパク〕も行われていたようにハ・バ・パ行の音がそれぞれ存在したとするなら、「かんほく」の〔pp〕は半濁音を表すものであると、考えることができるのである。

次に、〔mp〕が来る場合である。直前に綴字の末尾〔m〕〔n〕〔ŋ〕のどれかを加えて日本語の語頭の濁音を表すことができないので、〔m〕〔n〕〔ŋ〕を初声に用いる方法である。それはゴおよびバ行の音節に限って語中に用いられている。「さんふきょう」（三奉行）の〔mp〕がそれに当たる例である。ここでは「ふ」を表すハングルの表記の問題と重なってくるが、ハングルのp音には〔p〕〔b〕の二音素があるが、有声音と有声音の間では必ず〔b〕音が出るから、「さんふきょう」のように〔m〕で終わる撥音の後ろにあるpの場合はその音一つだけで濁音を表すのに充分なはずである。それをわざわざまた〔m〕をそえて書いている。その理由としては次のようなことが考えられる。『訓民正音』の合字解に合用並書と各自並書についてが述べられているが、それによると合用並書というのは違う字音を二つ以上並べること、それには初声、中声、終声の

三種類があると書いてある。同書ではその合用並書の例があげられているが、その音価については触れていない。許雄氏によれば（注9）、合用並書の音はそれぞれ独特の音価を持っていて、それぞれ発音されたということである。そこで考えられるのは、「さんふきやう」の「ふ」の〔mp〕は濁音表記のために造られたものであったとしても、〔m〕の音と〔p〕の音はそれぞれに発音したのではないだろうか、ということである。あえて、〔m〕を入れて表記したのは、その「ふ」が濁るのを強調するために書かれたものだと思われる。つまり、次に出てくる「せんふ」「はんふん」「ふんへつ」よりは、この本を書いた朝鮮人にはもっと強い鼻音で聞こえたのかも知れない。次の「せんはん（千萬）」も「は」のところで〔mp〕を用いている。撥音のところは「さんふきやう」も「せんはん」も同じく両唇音〔p〕音の前であるため〔m〕で発音されたことがわかる。

次に出てくる「せんくわん」の「せん」（飡）はカ行の前では〔ŋ〕または〔n〕で書かれているのに、これだけがカ行の前で〔m〕になっているのは不合理である。これもハングルの漢字音に引かれて〔m〕になったと言える。『倭語類解』の下十三、器具のところには、同じ漢字ではないが〔簍〕という漢字が出ていて、日本語では〔sen〕、ハングルでは〔chyem〕となっている。また朝鮮の『弘字玉篇』（注10）にこの意味を表す語として〔chyem〕と出ている。そのようなことから、ハングルの漢字音が〔m〕で終わるため、それに引かれて〔m〕と表記してしまったのではないだろうか。

次の語の「せんふ」（膳部）「はんふん」（半分）「ふんへつ」（分別）と、地名を表している「たんは」（丹波）、和語の「なん」（何）の撥音はすべて〔m〕で書かれているが、これは両唇音の前であるためであると考えれば、特別に注目すべきことではない。

以上本文で〔m〕で書かれた撥音の例を見てみたが、例からわかるように、朝鮮漢字音の影響のものをのぞけば、撥音は〔m〕〔p〕〔b〕の前で〔m〕になっている。これは前掲の『日本大文典』の内容と一致しているのである。

4-2 日本語で「ん」と書かれていて、ハングルの〔ŋ〕で書かれているもの

表 2

ハングルの〔ŋ〕で書かれているものは六種類三十例出てくるが、和語の「ごねんごろ」が二十例で半数以上を占めている。これは濁音の表記を兼ねていると思われるものと撥音だけを表しているものとがある。その区別については言葉ごとに説明していくことにする。

表の各項を見てわかるように、〔ŋ〕で表れている撥音の次には〔k〕〔g〕だけがきている。つまりカ行の前の撥音は〔ŋ〕で表していると考えられる。

この〔ŋ〕に関する記述はキリシタン資料では〔ŋ〕の発音としては見つからないが、鼻音のような発音が書かれている。『日本大文典』（p637）に「D、Dz、G の前のあらゆる母音は、常に半分の鼻音かソソネーテかを伴ってゐるやうに発音される。即ち、鼻の中で作られて幾分か鼻音の性質を持つてゐる発音なのである。例えば、Māda（未だ）、Midō（御堂）、m'adoi（惑ひ）、nāda me（宥め）、nādetē（撫でて）、nido（二度）、mādzu（先ず）、āgiuai

表 2

	日 本 語	ハ ン グ ル	ハングルのローマ字表記	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	計
1	いんさん（慰勸）	잉 긴	'iŋ kin						2		1			3
2	たんかう（談合）	땅고우	ttaŋ ko 'u		1		1			1			1	4
3	せんきう（前規）	선크 규우	zyəiŋ kyu 'u		1									1
4	せんこう（前後）	선크 교우	zyəiŋ ko'u						1					1
	〔地名〕													
5	たんこ（丹後）	당 고	taŋ ko									1		1
	〔和語〕													
6	ごねんころ（御懇）	꺠 녕고로	ŋko nyəŋ ko ro	4		1			4	4	1	1		15
7	ねんころ（懇）	녕고로	nyəŋ ko ro	1				3			1			5
計				5	2	1	1	3	7	5	3	2	1	30

（味わひ）、‘aguru（上ぐる）、‘agaqu（足搔く）、c‘aga（加賀）、fanaf‘ada（甚だ）、f‘agama（羽釜）など』とあることから、当時〔ɸ〕の発音が存在していたと思われる。

言葉一つひとつを見てみると、「いんきん」（慇懃）は本文の中には全部で八例出て来る。その中で三例だけ「いん」が〔ɸ〕となっていて、あとの五例は〔n〕となっている（表6参照）。巻六に〔ɸ〕のものが二例と〔n〕のものが一例、巻八に〔ɸ〕のものが一例と〔n〕のものが一例、そして巻七と巻九に〔n〕のものが各々二例と一例出ている。八例のうち三例だけが〔ɸ〕になっているので著者がたまたま聞き間違えたと言えなくもない。ただし、巻六や巻八に〔ɸ〕と〔n〕の音が並存しているので成立年代の差による傾向とは明確には言えないものの、比較的後の時代に成立したと言われる（注11）巻五・六・七・八においては「いんきん」の「いん」の発音が〔ɸ〕の音で入っているということは特記するにあたいするだろう。また、他の語を見ると巻五・六・七・八以外にも〔ɸ〕の音が入っているが、例えば「ごねんごろ」の発音はすべて〔ɸ〕で表されているが、巻五・六・七・八にその半数以上が出ている。

次に濁音の問題であるが、「慇懃」について日葡辞書には「Inguin」と書かれていて、「き」が濁ることから「いん」の〔ɸ〕は発音を表すとともに、濁音を表しているものと言ってもいいと思う。

次に「たんかう」が四例出てくるが、これは巻二には〔ttaɸ ko‘u〕、後の巻四・七・十のところには〔taɸ ko‘u〕、となっている。ここでは「タ」を表しているところに〔tta〕と〔ta〕となっていて問題となっている。これは前に述べたハングルの並書の問題と重なって、濁音を表しているか、清音を表しているかの問題になるが、日葡辞書には「Dan C‘o」と書かれている。それなのに、ハングル表記では濁音とは読めない表記になっているのは語頭の表記なので、濁音と清音をききまちがったと考えられる。発音の「ん」〔ɸ〕は発音だけを表しており、濁音の表記ではないと思われる。

和語として一つ出てくる「（こ）ねんころ」（懇）は、先に述べたように全部で二十例出てくる。その中の巻一の一例、巻五の三例、巻八の一例、合わせて五例は「ねんころ」の形として出てくる。日葡辞書に「Nengoro」と書かれてい

て、濁っているので、「こねんころ」の「ん」の〔ŋ〕は撥音と共に次に来るハングルの初声の濁音化を表しているものと思われる。

4-3 日本語で「ん」と書かれていて、ハングルで〔n〕で書かれているもの (字音語)

『捷解新語』で撥音が入っている語の大部分は、ハングルで〔n〕で書かれている。それを、次のように分けて考察する。

- (1) 単純に撥音を表すだけのもの(表3)
- (2) 単純に撥音を表すが、直後のハングルの初声に〔z〕を表す「△」が用いられたもの(表4)
- (3) 撥音を含む一字漢字によるサ変動詞(表5)
- (4) 撥音を表し、かつ直後のハングルの初声を濁音化させるもの(表6)
- (5) 日本語では撥音表記「ん」がなく、ハングルでは撥音表記なされているもの(表7)

これらはそれぞれ表3～7にまとめてある。各表は、表1で行ったような後接音による分類をしなかった。また、同じ語・同じ形態素・同じ音を表していると思われるものでも、ハングルの表記が異なっている場合には、別々にとりあげた。

巻別に語を数えることは音の問題にはそれ程重要ではないと思うが、巻の特徴が少しでもわかるのではないかと思い、巻別に分類してみた。

4-3-1 単純に撥音を表すだけのもの

表3

総数は五百六十七例で、巻一が四十六、巻二が二十五、巻三が三十六、巻四が六十、巻五が六十七、巻六が四十、巻七が三十七、巻八が六十四、巻九が七十、巻十が百二十二例である(表3参照)。この結果は吉田和子氏の調査結果(注12)と比べることができる。吉田和子氏は、日本語文中における漢語の数を調べて、異なり語数が三百三十二語、のべ語数は千百十六語であることを指摘している。撥音を有している漢語は異なり語数百六十五語、のべ語数は五百六十七例である(表4、5、6、7をあわせると数はもっとふえる)。これにより撥音が入る漢語

表3-①

	日 本 語	ハ ン グ ル	ハングルのローマ字表記	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	計
1	あんたい (安泰)	안다이	'an ta'i						1		1			2
2	あんない (案内)	안나이	'an na'i	1					1	1	1		3	7
3	いこん (遺恨)	이 콘	'i kon										1	1
4	いつきん (一斤)	일 킨	'it kin										1	1
5	いちゑん (一円)	이지연	'i ei 'yən		2								2	4
6	いんとく (陰徳)	인 도구	'in toku								1			1
7	ゑんいん (延引)	연인니	'yən 'in							1	1		2	4
8	ゑんせき (宴席)	연세기	'yən syəi ki								1		7	8
9	ゑんてい (湖底)	연테이	'yən tyəi 'i					1						1
10	ゑんろ (遠路)	연 로	'yən ro								1			1
11	ゑんろう (遠路)	연로우	'yən ro'u								1		1	2
12	かつくわん (各官)	각 관	kak koan										1	1
13	かつちん (餅)	갈 킨	kat cin									1		1
14	かつてん (合点)	갈 턴	kat tyən				1	1			1			3
15	かんにょう (肝要)	간 뇨우	kan nyō'u				1							1
16	かんにん (堪忍)	간 닌	kan nin	2			1							3
17	きかん (貴幹)	기 간	ki kan										3	3
18	きふん (気分)	기 분	ki pun										1	1
19	きめん (貴面)	기 면	ki myən										1	1
20	きょうさん (仰山)	교우산	kyō'u san		1	4								5
21	きゃくしん (客人)	가구신	kya ku sin	1		1								2
22	きんす (金子)	킨 수	kin su								2			2
23	きんねん (近年)	킨 년	kin nyən				1							1
24	くてん (口伝)	군 턴	kun tyən				2					1		3
25	くわいふん (過分)	과이분	koai pun							1				1
26	くわんちう (館中)	관주우	koan cu'u									2	1	3
27	くんくわん (軍官)	군 관	kun koan	2										2
28	くわんにん (官人)	관 닌	koan nin				1							1
29	はいけん (拝見)	화이견	hoa'i kyən										6	6
30	そんしょうはいけん (尊書拝見)	존 쇼화이견	zon syo hoa'i kyən										2	2

表3-②

	日 本 語	ハ ン グ ル	ハングルのローマ字表記	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	計
31	にうくわん (入館)	니우관	ni'u koan	1								6	7	
32	けにん (下人)	계 닌	kyœi nin				1		1	2	2			6
33	こんさつ (懇礼)	곤 살	kon sat									1	1	
34	こんてう (今朝)	곤토우	kon tyo'u									3	3	
35	こんにち (今日)	곤니지	kon nici	1	1	1	2	2	2		2	1	12	
36	こんみやう (今明)	곤묘우	kon myo'u									2	2	
37	こんや (今夜)	곤 야	kon 'ya				2						2	
38	さいかん (才幹)	사이 간	sa'i kan			1							1	
39	さいはん (裁判)	사이 판	sa'i mpan							1			1	
40	さいせん (最前)	사이 섰	sai zyœin				1						1	
41	さうこん (雑言)	소 웅곤	zo'uŋ kon		1								1	
42	さうたん (相談)	소운단	so'un dan									3	3	
43	さうたん (雑談)	소 우단	zo'u tan		2				1				3	
44	さうてん (早天)	소우텐	so'u tyœin			1							1	
45	さうはん (早飯)	소우환	so'u hoan									1	1	
46	さん (参)	산	san									2	2	
47	さん (蓋)	산	san		1	2			1				4	
48	さんくわい (参会)	산관이	san koa'i									1	1	
49	にさんにち (二三日)	니산니지	nisan nici	1		1				1	3	1	7	
50	さんし (三使)	산 시	san si					3	3		2		8	
51	さんそう (三艘)	산소우	san so'u				2						2	
52	こさんにち (五三日)	고산 니 진	ko san ni cin									1	1	
53	しうにさんにち (十二三日)	시우니산니지	zi'unisan nici					2					2	
54	しったん (十端)	십 단	zit tan				1						1	
55	しなん (指南を)	시 난오	zi nan 'o								1		1	
56	しめん (紙面)	시 면	zi myan									2	2	
57	しふん (時分)	시 분	zi pun				4					1	5	
58	しょかん (書簡)	쇼 간	syo kan	1									1	
59	しょしん (初心)	쇼 신	syo sin	2									2	
60	しょたいくわん (諸代官)	쇼다이관	syo ta'i koan									3	3	

表 3-③

	日 本 語	ハ ン グ ル	ハングルのローマ字表記	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	計
61	しゅつせん (出船)	쉴 선	syut syən					2	5		6			13
62	しゅんたい (辞退)	쉴다이	syun ta'i			1							1	
63	しゅうくわん (正官)	쇼응관	syo'uŋ koan	5	2	3	2							12
64	しんか (臣下)	신 가	sin ka			1							1	
65	しんしゃく (斟酌)	신사구	sin sya ku	1					4	1	3	1		10
66	しんす (信使)	신 수	sin su					9	3	9	11			32
67	しんてい (心底)	신테이	sin tyəi'i								1		1	
68	しんめい (神妙)	신표우	sin myo'u									1	1	
69	しんもつ (進物)	신표쥬	sin mo ccu							2			2	
70	しんろん (進覧)	신 란	sin ran										1 1	
71	すいふん (随分)	수이분	su'i pun	1			2				1		2 6	
72	すいもくせん (水木船)	수이모구선	su'i moku syən	1									1 2	
73	せいしん (誠信)	서이신	syə'i sin			1	2		2	1	1		7	
74	せいてん (晴天)	세이텐	syəi'i tyən										1 2	
75	せうゑん (小園)	쇼우연	syo'u 'yən						1				1	
76	せん (專)	선	syən					1				1	2	
77	せんいち (專一)	선이지	syən 'ici										1 1	
78	せん (膳)	선	syən						1				1	
79	せんこう (前後)	션교우	zyəin ko'u				1						1	
80	せんこく (先刻)	션교구	syən koku										1 1	
81	せんちう	션쥬우	syən cyu'u						2				2	
82	たいせん	다이선	ta'i syən										1 1	
83	とうせん (都船)	도우션	to'u syən	1		2							3	
84	とせん (徒然)	도션	to zyan									1	2 3	
85	しせん (自然)	지션	zi zyən			1		1				1	3	
86	とうせん (同然)	도우션	to'u zyən								3		3	
87	いっせん (一船)	잇션	'it syən				1						1	
88	ひせん (飛船)	비선	pi syən				1	1					2	
89	にせん (二船)	니선	ni syən	1									1	
90	にかうせん (二号船)	니교우선	ni ko'u syən										1 1	

表 3-④

	日 本 語	ハ ン グ ル	ハングルのローマ字表記	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	計
91	せんれい (前例)	센 레이	syəin ryəi'i			1	1							2
92	やせん (夜前)	야 센	'Ya zyən										3	3
93	せんねん (千年)	센 년	syəin nyən			1								1
94	たいくわん (代官)	다이관	ta'i koan	2	3	2	11						1	19
95	たいくん (大君)	다이군	ta'i kun						1	3				4
96	たうねん (当年)	도우년	to'u nyən										1	1
97	たにん (多人)	다 닌	ta nin						1	1	2			4
98	たいめん (対面)	다이면	ta'i myən	1			1	1		5				8
99	たふん (多分)	다 분	ta pun	3	1			1		1			1	7
100	いちたん (一段)	이진단	'i cin tan									2	3	5
101	このたん (段)	고노단	kono tan										4	4
102	いったん (一端)	일 단	'it tan				1							1
103	ちうくわん (中官)	쥬웅관	cyu'uŋ koan						3					3
104	ちうしん (注進)	지우신	ci'u sin	2			1	5					1	9
105	ちんみ (珍味)	진 미	cin mi									1		1
106	ちゃくくわん (著館)	자궁관	eya kuŋ koan										2	2
107	てうせん (朝鮮)	쥬우선	cyo'u syən			1		4			1	2		8
108	てんき (天気)	텐 기	tyən ki		1			6	3		1		3	14
109	てんち (天地)	텐 지	tyən ci				1							1
110	にほん (日本)	니 본	Nipp'on		1							6	2	9
111	にほん (日本)	니 혼	nihon	1		2		3				2		8
112	けんもつにん (見物人)	검모쥬닌	kyam mocunin					1						1
113	いちにん (一人)	이지닌	'i ci nin					1	1					2
114	ににん (二人)	니 닌	ni nin					1		2				3
115	ころくにん (五六人)	고로구닌	koroku nin									1		1
116	しうごにん (十五人)	쥬 우궤 닌	zi'u ŋko nin					1						1
117	りゃうにん (兩人)	료우닌	ryo'u nin					2			1			3
118	いちねん (一年)	이지년	'i ci nyən				1							1
119	しうねん (十年)	쥬 우년	zi'u nyən									1		1
120	くろくねん (五六年)	궤로구년	ŋko roku nyən									1		1

表 3-⑤

	日 本 語	ハ ン グ ル	ハングルのローマ字表記	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	計
121	きょねん (去年)	교 년	kyo nyən										1	1
122	ねん (念)	년	nyən	1			2	3	1	2			1	10
123	こはん (小判)	교 반	ko pan								1			1
124	さくはん (晩)	사구 만	sa ku mpan										2	2
125	はん (晩)	만	mpan	1					1					2
126	はんつき (半月)	환주기	hoan cu ki								1			1
127	ひはん (批判)	피 판	p'i p'pan					1						1
128	はん (番)	반	pan	3	1		4	3						11
129	ひん (便)	편	p'in	1									1	2
130	ふうしん (封進)	후우신	hu'u sin	1	2	2							4	9
131	ふさんかい (釜山浦)	후산카이	hu san kka'i	5	2	1		1					6	15
132	ふしん	후 신	hu sin				2						1	3
133	ふん (分)	분	pun					1		1	1			3
134	へんしょ (返書)	편 송	p'yən syoθ			1		1						2
135	いっへん (一遍)	일 번	'it pyən		1									1
136	へんかす (遍数)	편간수	p'yən kan su			1								1
137	へんれい (返礼)	편례이	p'yən ryəi'i			1						2		3
138	ほんき (本気)	혼 기	hon ki			1		1			1		2	5
139	ほん (本)	혼	hon			1								1
140	ほんまう (本望)	혼모우	hon mo'u								1		1	2
141	みしん (未進)	미 신	mi sin										1	1
142	むいん (無音)	무 인	mu 'in										1	1
143	めんほく (面目)	면뻔구	myən mpo ku					1						1
144	もん (門)	몬	mon										1	2
145	もんあん (問安)	몬 안	mon 'an	1	1			2		2	2			8
146	ろんちゃう (乱潮)	란쵸우	ran cyo'u								2			2
147	りやうけん (量見)	료웅견	ryo'uθ kyən					1						1
148	れいまんまん (礼萬々)	레이만만	ryəi'i man man										2	2
149	ゆたん (油断)	윤 단	'yun tan						1				1	2
150	たんたん (端々)	단 단	tan tan					2	1					3

表 3-⑥

	日 本 語	ハ ン グ ル	ハングルのローマ字表記	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	計
151	こんはん (今晚)	곤 반	kon mpan										1	1
152	はんはん (萬々)	반 반	mpan mpan										1	1
153	さんはんきん (三萬斤)	산 반 긴	san mpan kin										1	1
154	しゅんはい (巡杯)	슌바이	syun pa 'i		1									1
155	しゅうふう (順風)	슌뽕우	syun mpu 'u					1	1					2
156	てんひつ (伝筆)	뎌비쥬	tyən pi cçu										1	1
157	めんはい (面拝)	뎌바이	myən pa 'i										1	1
158	はんすい (判使衆)	환수슈	hoan su syu	1	1	1	4	1		1	1			10
	[地名]													
159	ゑちせん (越前)	에지 쉼	'yæi ci zyən									1		1
160	さんやう (山陽)	산요운	san 'yo 'un									1		1
161	ちくせん (筑前)	지구 쉼	ci ku zyən							2		1		3
162	なんかい (南海)	난가이	nan ka 'i									1		1
163	ひせん (備前)	비 쉼	pi zyən									2		2
164	ふせん (豊前)	뽕 쉼	mpu zyən									1		1
165	くん (郡)	군	kun										35	35
計				46	25	36	60	67	40	37	64	70	122	567

は本文中における漢語の半分以上の量を示すことがわかるだろう。その中で圧倒的に数が多いところは巻十である。それは巻十が候体の書簡文であり、会話文である他の巻と違い、字音語が多く使われたことから、撥音の入る漢語も他のところよりは多くなったのであると思われる。

全体的に眺めてみると、〔m〕と〔ŋ〕の撥音は語中に使われる場合が多いが、語尾に使われる場合は〔n〕だけである。これは、「語尾ならば後接音がどんな音でも〔n〕と発音した」と考えるよりも、「表記の際に単語の語尾という意識が強くはたらいってしまったために〔n〕で表した」と考える方が妥当であろう。つまり、語尾には「実際には後接音によって〔n〕〔m〕〔ŋ〕を使いわけて発音していたが、表記上〔n〕とただけ」というわけである。

表中の「いんき」（異議）は、日本語表記で「ん」が入っているが、これはハングルで次の初声を濁音化させる〔ŋ〕を日本語の「ん」におきかえて表記したものではないだろうか。

また、表のなかの154から157までの「しゅんはい」（巡杯）「しゅんふう」（順風）「てんひつ」（伝筆）「めんはい」（面拝）は、日本語表記「は」「ひ」「ふ」にあたる部分がハングルでは濁音に読めたり、濁音・半濁音のどちらにも読めたりするものである。しかし、『邦訳日葡辞書』ではいずれも半濁音しか出てないので、それに従ってここにまとめておいた。これらは、本当に半濁音を表すつもりならば〔pp〕としなければならないはずである。それがなされていないのだから、ハングル表記の間違いだとか、濁音・半濁音のゆれだとかが考えられるが、確かなことは何も言えない。いずれにしても、これらを半濁音とすれば、その前の撥音は「単純に撥音だけを表す」用法であるということになる。

4-3-2 単純に撥音を表すが、直後のハングルの初声にザ行を表す〔z〕が 用いられるもの

表 4

ハングルの〔z〕が用いられている点が特徴的なので、これだけでまとめてみた（表5参照）。同じ音を表しながら他のハングル表記で書かれているもの（表6参照）と比べてみたが、音の差などは特に感じられない。これもやはり表

表 4

	日 本 語	ハ ン グ ル	ハングルのローマ字表記	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	計
1	ゑんさまく (円座幕)	엔△마구	'yən za ma ku		1									1
2	きんす (金子)	킨 수	kin zu								1			1
3	しやうくわん (正官)	쇼웅관 △	syo'uŋ koan zi	7	2									9
4	たんし (単字)	단 △	tan zi	1										1
5	へんし (返事)	편 △	p'yən zi					6		2			2	10
6	まんし (萬事)	만 △	man zi	2		1	1		1	1				6
7	はんし (萬事)	만 △	mpan zi		1				2			1		4
8	めんしやう (面上)	엔쇼우	myəin zyo 'u		1	1							1	3
計				10	5	2	1	6	3	3	1	1	3	35

記上の問題にすぎないものと思われる。

4-3-3 撥音を含む一字漢字によるサ変動詞

表 5

表 5 は撥音を含む一字漢字によるサ変動詞を集めたものだが、これには次に〔z〕音が来る場合と〔s〕音が来る場合がある。「存じ」などの「存」の後の音が濁音であることは辞書でわかる。したがって〔s〕の前の撥音は濁音表記を兼ねていて、〔z〕の前の撥音は、撥音だけを表していると思われる。

4-3-4 撥音を表し、かつ直後にハングルの初声を濁音化させるもの

表 6

ここで集めた語は、撥音の直後の初声が清音で表記されるものである。

「かんちやう」(頑丈)は『邦訳日葡辞書』に「Gangio」とあり、濁音であることは自明である。「めんしやう」(面上)も同じく「Menjo」と出ているだけなので、濁音であることがわかる。ここで問題になるのは「しふんから」(時分柄)である。撥音が〔n〕で表記され、次の初声は〔k〕である。直後の初声は濁音であることを明示するなら、〔ŋ〕を使うはずであるのに〔n〕を用いら

表 5

	日 本 語	ハ ン グ ル	ハングルのローマ字表記	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	計
1	あし (案)	안 △	'an zi				1				1			2
2	かんする (感)	간수루	kan suru							1				1
3	かんし (感)	간 △	kan zi	1		1						1		3
4	さんし (参)	산 시	san si								1			1
5	しんし (進)	신 △	zin zi								2			2
6	しんしやう (進)	신쇼우	sin syo 'u					1						1
7	そんし (存じ)	손 △	zon zi	2	2	5	6	3	4	6	4	3	14	49
	そんすれ	손 수렌	zon su ryøin				1		2		1			4
	そんすれ	손 수렌	zon zu ryøin									1		1
	そんする	손 수루	zon su ru				2				2		2	6
	そんせす	손 셴수	zon zyøin su	1										1
	そんせんものに	손 셴 몬노니	zon zyøn mononi									1		1
8	はんする (反)	환수루	hoan su ru									1		1
9	はんする (番)	몐수루	mpan su ru				1							1
10	はんし (晩じ)	몐 시	mpan si		1									1
計				4	3	6	11	4	6	7	11	7	16	75

れていることから、清音であると考えられないこともない。しかし、『邦訳日葡辞書』では「Iibungara」となっている上、接尾辞の部分にあたる「から」も同書に「Gara」と出ていることから、濁音と考えた方がよいだろう。

次に「りもんち」〔rimonci〕である。この語は、ハングルの対訳によって「やきもち」の意であるとわかる。それにあてはまる日本語としては、女房詞の「恪文字」が考えられる。原刊本の表記は、「りんもじ」のことを著者が誤って覚えていたためになされたものかも知れない。ただ、日本語表記とハングル表記の一致を根拠に覚え違いを主張するならば、あまり説得力があるとは言えない。

表 6

	日 本 語	ハ ン グ ル	ハングルのローマ字表記	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	計
1	あんとう (安堵)	안 도 우	'an to 'u					2						2
2	いんき (異議)	잉 기	'inŋ ki					1			2			3
3	いんきん (恩慫)	인 긴	'in kin						1	2	1	1		5
4	かんちやう (頑丈)	간 초 우	kan cyo 'u					1						1
5	こんと (今度)	곤 도	kon to		1	1	1				3		1	7
6	しふんから (時分柄)	시 분 가 라	zi pun kara				1							1
7	しつたんつ (十端づつ)	십 단 주 주	zit tan cuccu				1							1
8	しんちう (心中)	신 주 우	sin cyu 'u				1		2	1		2		6
9	せんと (先度)	견 도	cyæn to	1		2					1			4
10	せんとう (船頭)	션 도 우	syæn to 'u					3						3
11	たいくわんとも (代官ども)	다이 관 도 모	ta 'i koan to mo	2			5							7
12	ちくせんとの (筑前殿)	지 구 셴 도 노	ci ku syæn to no							3				3
13	とうせんちゃ (同然ちゃ)	도우 셴 차	to 'u syæn cya				3		2	1	1			7
14	なんき (難)	난 기	nan ki					1						1
15	なんたい (難題)	란 다 이	ran ta 'i				1							1
16	さんになつ (三人宛)	산 닌 주 주	san nin eucu					1						1
17	にになつ (二人宛)	니 닌 주 주	ni nin cu ccu					1						1
18	けにんとも (下人ども)	계 닌 도 모	kyæi nin to mo								1			1
19	ふんて (分)	분 데	pun tyæi				3	1	1		1			6
20	にねんて (二年てわ)	니 념 데	ni nyæn tyæi				1							1
21	まんそく (満足)	만 소 꾸	man so kku					2						2
22	もんこん (文言)	몬 곤	mon kon			1								1
23	めんしやう (面上)	면 쇼 우	myæn syo 'u			1							2	3
24	さんしやう (参上)	산 쇼 우	san syo 'u							1				1
25	くわんはく (関白)	관 바 구	koan pa ku										1	1
26	こんねんぶん (今年分)	곤 념 분	kon nyæn pun										1	1
27	りもんち (格文字)	리 몬 지	ri mon ci										1	1
	[地名]													
28	くんて (郡)	군 [계]	kun tyæi									35		35
29	さんいんたう (山陰道)	산 인 도 우	san 'in to 'u										2	2
計				3	1	5	17	13	6	8	10	40	6	109

なぜなら、ハングル表記は日本語表記に引きずられている可能性があるからだ。

ために『邦訳日葡辞書』で女房詞の「～文字」を調べてみると、次のものがある。

Qiamo jina, 1, Qiaxa キャモジナ、または、キャシャ（花文字な、または、花奢）

† Como ji コモジ（小文字）小麦。…。

† Fimo ji ヒモジ（ひ文字）空腹である。…。

† Mumoji ムモジ（む文字）小麦、大麦。

† Mumoji na （無文字な）…。文字を知らない者。

† Nimoji ニモジ（に文字）にんにく。…。

最初の「Qiamo jina…」以外は補遺で追加されたもの（「†」はそのしるし）だが、いずれも「～もじ」であって、「～もんじ」ではない。格文字についても、同様に、「りんもじ」であったとすべきであろう。

ここで、著者はこの語を正しく覚えていたとすると、原刊本の「りんもち」は単なる書き違いということになる。残念ながら、覚え違いなのか、聞き違いなのか、不明である。かりに、原刊本の表記を信用して、調査対象として取り扱ってみると、「りんもち」の〔n〕も、撥音を表す上に直後のハングルの初声を濁音化させるものと考えべきだろう。一応取り上げてはみたものの、おおいに疑問に残るところである。

4-3-5 日本語では撥音表記「ん」がなく、ハングルでは撥音表記がなされているもの

表 7

日本語の平仮名の表記には撥音は書いてないが、ハングル表記には入っていることから、実際の音としてはあったと思われるものである。同じ語で、他の所では、撥音が入っているためにここでは撥音が抜けたと推測されるのである。表 7 の内、7 の「とねき」（東英）（『倭語類解』動静、上、二十九）と 12 の「こむゑき」（公貿易）（『倭語類解』雑語、下、三十三）は朝鮮語の影響だと思われる。「わさと」（態と）はハングルで〔n〕が入る語が 5 例、入っていない語が

表 7

	日 本 語	ハ ン グ ル	ハングルのローマ字表記	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	計
1	かかゑて (考)	강가에테	kaŋ ka 'yøi tyøi	1			4							5
2	かかゑに (考)	강가에니	kaŋ ka 'yøi ni								1			1
3	かかゑす (考ず)	강가엔수	kaŋ ka 'yøin zu				1							1
4	かかいて (考)	강가이테	kaŋ ka 'i tyøi			1								1
5	けかく (懸隔)	결 가구	kyøiŋ ka ku				1							1
6	さいすゑ (差使員)	사이수연	sa 'i su 'yøn				1							1
7	とねき (東萊)	동녕기	toŋ nyøŋ ki		5	4	2	3	5				10	29
8	なとして (何)	난토시뻬	nan tto si ttyøi	1										1
9	なくわち (何月)	낭과치	naŋ koa ci					2	1					3
10	なちり (何)	난자리	nan cya ri						1	1				2
11	まさら (満更)	만사라	man za ra				1							1
12	こむゑき (公貿易)	공무예기	koŋ mu 'yøi ki										1	1
13	わさと (態)	와삿또	'oa za tto							2				2
		완삿또	'oan za tto		1				1		2		1	5
14	たな (旦那)	따 나	tta na							1				1
		탄 나	ttan na							1				1
	[地名]													
15	ちくこ (筑後)	치구고	ci ku ŋko									1		1
16	ふこ (豊後)	부고	mpuŋ ŋko									1		1
17	ひこ (肥後)	빙 고	p'iŋ ko									1		1
18	ひこ (備後)	빙 고	p'iŋ ko									1		1
計				7	5	3	11	7	3	5	3	4	12	60

2例出てくる。発音が入っている例は他の文献では見当たらないようだ。「わさと」の「さ」にあたる部分は〔z〕を用いて表記されているので、その直前の〔n〕は単に撥音を表すだけのものとも考えることもできるが、「ん」を入れた「わんざと」という形で用いられたという確証がない。そこから考えて、これは鼻音を表していると言えるのではないだろうか。

また、注意すべきところは、「たな」（旦那）の「た」のところは、並書で書かれている。そこからして、ハングルの〔tta〕は清音であることが考えられる。しかし、『邦訳日葡辞書』に「Danna」と出ていることを考えると、ハングル表記の方が間違っていると言うべきであろう。これは、前にも指適したように朝鮮人にとって語頭の清濁の区別がつけにくいものによるものであろう。

5. ま と め

以上、『捷解新語』の原刊本を資料として、中世末における撥音とその表記（特にハングル表記）について、考察を進めてきた。

本稿でえられた結果を簡単にまとめてみる。

当時の撥音には三つの音（〔m〕〔n〕〔ŋ〕）が存在し、ハングル表記では直後の音素によって区別されて書かれていたことが分かった。

〔m〕で発音される場合は、直後の音素が〔m〕〔p〕〔b〕である場合が多い。〔k〕の前でも一語三例あったが（兪官）、それはハングルの漢字音の影響であろう。また〔m〕の後に〔mp〕が来る場合が二語二例（三奉行、千萬）。これについては、〔mp〕の〔m〕がなくても、その前の〔m〕によって〔p〕が濁音化している（〔b〕になる）ことがハングル表記から明らかである。それにもかかわらず〔m〕を一つ余計に用いるのは、鼻音のような音が存在したことが考えられる。

〔ŋ〕の場合は、同じ語、たとえば「いんきん」が〔n〕でも、また〔ŋ〕でも表記されているが、その理由は正確にはわからない。

発音表記の中でほとんどを占めているのは〔n〕である。これらは、ほぼ全部が字音語である。さらに、字音語の語尾では〔n〕だけが使われていた。これは単語の語尾という意識の表れであろう。

撥音を表しかつ直後のハングルの初声を濁音化させる〔n〕については、大部分が判別がつけにくい場合もあった。

このように見てくると、日本語表記では「ん」の一字で片付けられる撥音も、ハングルでは比較的厳密に書き写されていたと言えよう。ただし、ハングルの撥音表記でも、直後の音の清濁などが関係してくると、その撥音の用法が判別しにくい場合があった。これについては、キリシタン資料など、同時代の他の資料と補い合いながら考察を進めて行くべきであろう。

6. おわりに

今回の考察では、自立語、特に名詞的なものを中心に扱った。それも、下接する付属語等にあまり注意を払わずに調べてきた。つまり、本文から自立語を切り取って持ってきて調べたという感じが強い。同時代の他の資料との比較も不充分であった。調査も一回だけしかしていないので、漏らした用例があることと思う。次の機会には、これらの欠点を補って考察し直したい。

なお、この調査を進めている途中で、気になる語があった。「ごろんじる」や接頭語の「御」、「ずは」などである。これらは折りを見て調査したい。

（注）

（注1） 京都大学文学部『改修捷解新語』の解題（安田 章）（昭和62年8月）による。

（注2） この文字がハングルと呼ばれるようになったのは、1928年「ハングルの日」を決めた日からで、その頃からハングルという名称がしだいに一般化し今日に到ったと考えられる。命名の由来については、ハンは大きな、グルは文字、つまり「大いなる文字」と解するのが一般的である。

（注3） 調査の対象・単位などについては、次のように規準を定めた。

1. 原刊本において、日本語で大きく表記された部分だけを調査対象とした。
2. 用例の収集にあたっては、京都大学『三本封照捷解新語釈文・索引・解題篇』の索引は用いていない。

3. 調査は一回調査である。
4. 調査単位は自立語を主に扱った。特に、形容動詞の語幹や、二字以上の漢語サ変動詞の漢語の部分などは、それだけで一語として扱った。ただし、後接音が関係してくる場合はこの限りではない。下接する付属語については、特に問題がない限り取り上げていない。
5. 表の配列は、基本的には、撥音を含む形態素の最初の音を五十音順に並べるようにした。ただし、都合により多少変更したところもある。
6. 表中のローマ字表記は京都大学『三本封照捷解新語 釈文・索引・解題篇』によった。漢字表記は、おもに「釈文」によったが、適当にあてはめたものもある。

(注4) 『日本大文典』 土井忠生訳 三省堂 (昭和30年)

(注5) 『邦訳日葡辞書』 土井・森田・長南編訳 岩波書店 (1980年)

(注6) 『倭語類解、本文、国語・漢字索引』 京都大学文学部 (昭和33年)
の下、十・布帛による。ほんとうの発音は〔mok myen〕であるけれど、「k」のところが次の「m」の影響で鼻音化してしまう。

(注7) 「『捷解新語』の原刊本と改修本」—「日本」と「看品」— (『国文学改』30、昭和38年3月)

(注8) ハングルは有気、無気で区別して、清・濁の対立では区別しない。そのため日本語の語頭音の清濁が区別しにくいからである。

(注9) 『国語音韻学』 (韓国、正音社) p319による。1983年。

(注10) 『国漢最新弘字玉篇』 (韓国、弘字出版社) 1958年。

(注11) 森田 武 「『捷解新語』成立の時期について」 国語国文第二十四卷第三号

(注12) 「『捷解新語』原刊本における漢語の研究」 (韓国外国語大学修士論文) 1985年5月。